特集

金属加工の可能性を求めて　宮村浩樹氏に聞く

宮村浩樹氏(㈲宮村工作所・大阪市)は、板金技術を基に“金属造形屋”として商業施設の内外装、看板・サイン、オブジェ、装飾金物、ピザ窯の排煙システム、舞台セットなど様々な分野の仕事に取組んで、金属加工の可能性を広げつつあります。そこで今月は宮村氏の作品を紹介するとともに、お話をうかがいました。

ホームページ　http://www.miya-hiro.jp
ブログ　http://tetsuken.exblog.jp

看板・サイン

銅板の皺エージングと錆エージングの組み合わせ

真鍮はガスエージング・銅板は薬品エージング

鉄板に青銅錆を起こして、岩盤ベースをイメージ

ブビンガーの彫りこんだ部分に亜鉛板のスクラップ張り

真鍮板を叩かずに絞り込んで加工

銅板と真鍮のコンビエージング

レーザー抜きした鉄板にウェザリング仕上げ

レーザー抜きした鉄板にウェザリング仕上げ

亜鉛鉄板のボディーに鉛ネックで造った音のでるギター看板

個人企業だからこそ

—宮村さんのブログを拝見していると、現在はピザ窯の排煙システムの仕事が多いですね。

宮村　今は、すごく多いです、ほんまに(笑)。こんなにお店があるのかな、と言う感じです。

—宮村さんの他のお仕事は、装飾的なものが多くて、一品、一品作り上げる感じですが…。

宮村　ピザ窯と排煙システムをユニットとして製品化しています。日本で専門に作っているところは少ないので、結構ニーズがあります。

—始められたきっかけは

宮村　先輩がイタリア料理のシェフで、お店に薪のピザ窯を入れることになり、「君、いつも鉄板扱っているから、煙突作れるんじゃない？」と、お話をいただいたのが最初です。作ろうとしたら、けっこう考えなきゃいけないことが多い。

　そのレストランはビルの9階でした。9階まで煙突を出したら「君、掃除どうするの？」(笑)…掃除をする機械も考えないといけない。また、煤を取る機械も考えないといけない。はじめて、そこで考えて作ったんです。

　電気集塵機や一般の水フィルターでは高価だし、ピザ窯の煤にはリスクが多い。焼肉や焼き鳥の油煙は取れますが、ピザ窯の薪の煤が細かすぎるんです。細かすぎて水に絡まない。水に溶け込みません。完全に上に浮いたままです。電気集塵機もフィルターがすぐ詰まってしまい、30分もたない。それに集塵機は高いですから。ピザ釜が200万円ぐらいなのに、集塵機が250万では何しているか分からない(笑)。売っているピザはせいぜい1000円台ですからね。

—煙突ひとつでも考えることは多い？

宮村　ピザ窯を設置する部屋の関係で、例えば煙突を一度下げないといけないことがあります。こういう煙突はファンがないと排煙できない。ピザ窯は450℃になり、煙突の中は250℃ぐらいの煙が流れています。国産のファンの耐熱温度は80℃程度なので、ファンが燃えてしまいます。そこで目をつけたのがスウェーデンの暖炉用のファンです。電圧が違いますから、こっちで電圧を変えるコンデンサーを考えた上で輸入しています。今では、イタリアから窯も直輸入しています。ピザ窯屋さんじゃないんですけれど(笑)。

亜鉛フレームにＧＬ鋼板を船の帆のようにイメージ

—それにしても、世の中にはこんなにピザ窯があるのかな、と思うぐらい多いですね。

宮村　月に5件ぐらいはやっています。でも、大企業が手を出すと商売にならないんです。毎日、毎日、ピザ窯の煙突を作るほどの量はありません。うちのような個人企業だからこそ、それも専門じゃないでしょ。他のことをやっていて片手間レベルのことだから、たぶん出来るんです。企業として投資をするほどのもんじゃありません。

銅板による帽子の製作を実演

生き物と食べ物以外は作れます

—他にはどんなお仕事をしていますか。

宮村　店舗の内装、外装。看板やサイン、それに舞台セットなどが中心です。化粧スレートや普通の屋根工事もやります。

—化粧スレートの工事で、釘をバンバン打って、気持ちいいとおしゃってましたね。
宮村　普段は釘を打つ仕事はそんなにありませんから、たまに釘を打つと気持ちいいですね(笑)。

—会社はお父さんと二人で。
宮村　そうです。親父は昭和12年生まれですが、まだ現役です。建築板金の仕事は、訓練校とうちの親父に教わりました。子供の頃から、ものづくりは好きでしたね。

—ご自身の仕事をどういうふうに考えていますか。
宮村　金属で造れないものは無い、生き物と食べ物以外は何でも造れる、と思っています(笑)。金属の性質を活かし、行けるところまで、行きたいですね。基本に忠実に…四角のものを四角に作るのが基本です…造ることをやり続けたい。それと、楽しむことですね。

—これ、出来ないんじゃないか、と言われると…
宮村　絶対やってやろうと…（笑)。出来ないというのは、口惜しいですよね。考えているときと言うのは、最高に楽しいです。

技能五輪がきっかけ

—いつ頃からですか、ご自身で意識して仕事をするようになったのは。
宮村　やはり技能オリンピックで海外に行ってからですね。金属に対する考え方の違い。日本ではエージング、銅板や鉄板をわざわざ腐らしてというか、古く見せることは少ないじゃないですか。それと作った家に対する考え方の違いを目の当たりにして、日本でしたら、予算がない、10年持てばいいんだという考え方に対して、向こうは、「家を建てたら100年」という考え方ですから。

—向こうの職業訓練校に体験入学したとありますが…。
宮村　1週間ぐらいでしたが。もう、眼にするもの全てにすごい興味がありましたね。道具も違いますしね。道具はぎょうさん貰いました(笑)。

技能五輪世界大会

—道具で一番違うなぁと思った点は、どんなところですか。
宮村　はさみに対する考え方ですね。我々のはさみは、遊びがあってガタガタじゃないですか。そういうはさみで切ると、「さすが板金屋さん！」となりますが、向こうは刃をピチピチに寄せていて、誰でも切れるはさみにしているんです。そんなはさみの訓練にいらん時間かけるなら、もっと先に進むことができるんだろう、という考え方だと思いました。日本は、技術が遠回りしている感じ。

—今は、技能五輪は出場していないのですか。
宮村　僕が出てから去年、24年ぶりにやっとエントリーしました。去年は静岡でしたからね。

—二人だけ？
宮村　二人だけですね。僕が出た後に選手を出さない、となった。審査基準でもめたんです。僕が出場したときは、ヨーロッパ諸国中心。課題を多数決で決めるから、当然西洋の屋根になるわけです。それでも日本人のレベルは結構高く、3日間で23時間の競技で、終わったときに全部仕上がっていたのは、僕だけでした。他の人は、全部タイムオーバーでした。で、審査したら、僕は入賞止まり。

—タイムオーバーは、日本の感覚からすると失格ですよね。
宮村　その当時の日本の関係者の方が、「どうなっているんだ。仕上がっているのが一番じゃないか。図面どおりにもなっている」と。それ以外にも言葉(英語)の行き違いで材料超過を取られていたり、いろいろありました。そんな、こんなで「こういう審査をするなら日本から選手は出さない」となったわけです。

—それでも宮村さんのお話をうかがうと、世界が変わった、みたいなことがあったわけですよね。そういう機会があってもいいのかな、とも思いますね。
宮村　次回はカナダですが、やはりエントリーしないという話になっています。予算的に大変、ということもあるようです。実際、僕のときも出場経費は実費です。出場するのに当時で45万円ぐらいかかりました。私のときは全板連が先頭に立って、全国１県１万円の寄付していただき、まさしく全国の板金店に支えられての出場でした。でもその間仕事が1ヶ月ぐらいできない。収入もなくなるのも困りますが、仕事が止まるのはもっと困る。その間は大阪府板が仕事を受けて、組合員さんが交替で仕事をやっていただきました。このことは、今でも感謝しています。

—単に出るだけじゃなくて…。
宮村　いろんなリスクがあるんです。能力開発協会の担当の方からは、技能五輪のエントリーは金属屋根

協会さんが頭に立ったほうが話が早いんじゃないですか、なんて話が出ていました(笑)。

小泉元首相より日本ものづくり大賞

ネットでの受注が9割

—いきなり、とんでもないところに話がいっちゃいましたね(笑)。技能五輪に行く前は、普通の板金の仕事をしていたのですか。

宮村　というよりも、技能五輪の時点は、まだ一人前じゃないんです。21歳ぐらいですから。その後しばらく建築板金中心の仕事をしていたのですが、自分が勉強してもそれを発揮する場面が少ない。また、「こうしたらもっといいですよ」と提案しても、「そうしたらお金かかるでしょ。これで十分です」と言われたり…価格だけの話になりがちでした。

そうこうしているうちに景気も悪くなるし、一所懸命働いても支払は手形。じゃあ人を認めてそれに見合うお金を出してくれる仕事は何かな、と思ったときに店舗や舞台セットとか、そっちのほうへシフトしようと…。

特に今は少子化で家が建たないじゃないですか。家は立たなくても、人間は必ずご飯は食べます。それに飲食店はつぶれても、サイクルが早い。仕事の量からしても店舗のほうが多いので、店舗の中で板金屋さんがやれるパートは何かな、と思ったら、ダクトとか看板、サインといった装飾関係になってきます。

—じっと待っていたのでは来ない仕事ですね。

宮村　そうですね。ウロウロといろんな所に出向いて売り込んでいましたね(笑)。それとアイデアを一杯つめて準備しておくことですよね。

—お客さんとじかに仕事をしたらいいのは分かりますが…。

宮村　インターネットが普及したので、それが出来る時代になりましたね。うちの場合はほぼ9割がインターネットからの仕事です。お客さんも話が早くて、ホームページを見て、ピンポイントで「2ページ目の左から2段目の感じの鞄が欲しい」なんて、具体的な注文が多いんですよ(笑)。

毎回、毎回、顔の見えない人と仕事していますから。支払も前金でいただく、終わったと同時に現金でいただく、そういう形にだんだんなりつつあります。

—ホームページはいつごろから。

宮村　2002年です。それまでは、自分が銅板の造形物を売り込みたいと考えたら、関心を持ってくれそうな人たちの集まるレセプションなどに顔を出して、作品の写真を持って見せて回っていました。自分が目指したい方向に行こうと思ったら、その方向の人たちのところに行かないと。じっとしていたらだめです。向こうは探してくれませんからね。一つ仕事をすると、それを見つけてくれる人が出てきます。そうなれば、一歩一歩前に前に行くじゃないですか。

—舞台セットの仕事は、どういう感じで始まったのですか。

宮村　ＮＨＫの朝の連続ドラマ…いしだあゆみさんのご実家をモデルにした「てるてる家族」…で、昭和20年代の5年くらい使った亜鉛鉄板の煙突を作って

海外向けの技能研修も

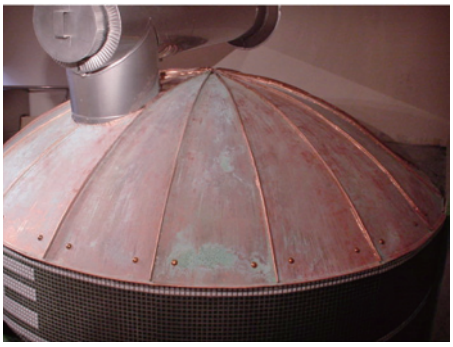
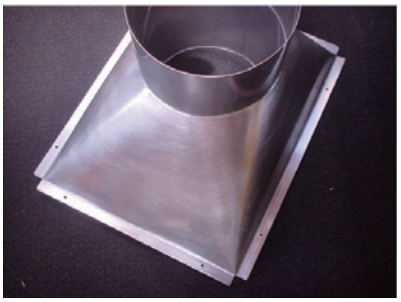
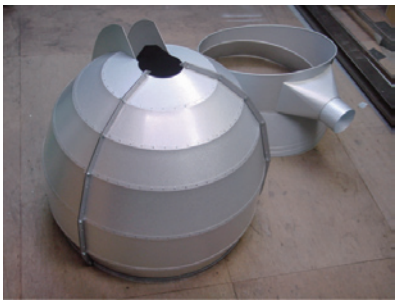
欲しいというお話が最初でした。そこから、ミュージカルのステージ装飾などで、古い感じのセットが多いですから、金属のエージング（素材の持つ特性を利用して、人工的にテクスチュアーを変化させ、古めかせること）をして欲しいと。

—金属をエージングさせることには興味があった。

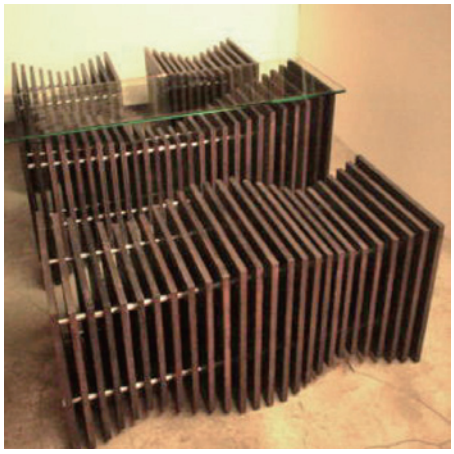
宮村　そうですね。エージングについては、その方法を色々研究しましたね。日本人はあまりやりませんが、アメリカ人はやりますね。そのせいか、ディズニーランドやユニバーサルスタジオの仕事はよくさせてもらいました。「あいつに頼んだら、こんな古い感じのものをすぐ作るで」と言う話が広まって、仕事がつながってきた感じです。

エージングの仕事は、看板やサインが中心ですが、板金屋さんからは銅板の一文字葺きの一部を入れ替えたいのだけれども、「そこだけ色が変わっちゃうからどうしよう」と言った相談が多いです。

煙突・フード

帽子・鞄・アクセサリー・椅子



“展開図フェチ”

—最近面白い仕事はしていますか。
宮村　これ、イカです。今、店舗の装飾用に製作中でテレビにも取り上げられて、収録中です。

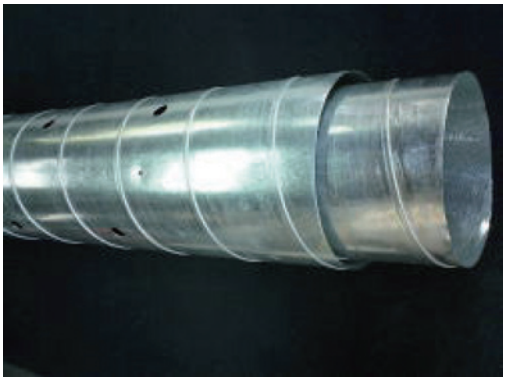
—展開して作っているのですか。
宮村　展開図が好きなんですよ。みんなに“展開図フェチ”と言われています(笑)。街を歩いていても、興味ある形があったら、「開いたらああなるとか、こうなる」とか、すぐ考えちゃいます。

このイカも展開図、描いてます。ＭＲＩ状態にして展開していきます。もともとは、幼稚園の頃にサイコロキャラメルの6面体の展開を知り、興味を持ったのが“展開図フェチ”の始まりだったようです(笑)。小学校の3年の時には、地球儀の製作実習で球面体の展開に驚いたり…と。高校2年のときにバイクのスポイラーを鉄板で作ろうとしたのですが、その時は展開図法を知らなかったので、新聞紙で型紙を起して、打ち出し・絞りなしでぶつ切りにして作りました。

ピザ窯・排煙システム

地上からの操作で簡単に煙突を掃除するシステムで、右側の先端部分に掃除用のブラッシャーが格納されている。

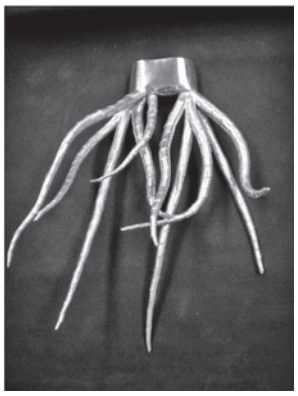
煙突を単独で排煙出来ない立地条件下で、やむをえず厨房ダクトに混合する場合はフード内に特殊空冷チャンバーを用いて火種を100%カット。



左記の条件下でフード上(天井上)にも特殊空冷煙突を用いて、天井上の設備(電線、ガス管、空調配管)などへの熱の影響を受けないようにします

—筋金入りですね(笑)。
宮村　これは銅板の帽子。

—銅板には見えないですね。実際に買われる方っていらっしゃいますか。
宮村　もっと手を加えたら本当に分からないですよ。お店のオブジェとして買っていただきました。


製作中のイカ

—軽いですね。
宮村　0.15ミリです。平板のままだったら、ペラペラして持てないです。持つだけでひずみが出てしまいます。くちゃくちゃにしてあるから硬化しています。

—つばのヘリは、ちゃんと、あだ折りをしてある(笑)。
宮村　板金屋ですからね(笑)。これ(帽子)を作れと言われたら、板金屋さんであれば、誰でも作れると思います。ぜんぜん難しいことありません。でもそれを実際に作ってしまうのと、「やれば、できるわ」で終わるかには、差があるんだよ、と訓練校の生徒に言っています。それと、もう一歩先に行けば、それを飯の種にできるかどうかです。板金屋さんは器用だから色々なものを作ります。でも、それを商売にしている人が少ないのは、もったいないと感じますね。

訓練校、ライブショー

—訓練校の先生はいつから。
宮村　2000年からです。

—自分でやらないといけないと思った？
宮村　きっかけは組合からの依頼です。ただ、そうですねぇ、当時は年配の先生が多かったんです。で、見せられないのです。目の前で。助言は出来るのですが。「拍子木でパンッ」とやるところ見せてくださいと言うと、なかなか難しいところがあった。仕事は絶対見せるべきです。見せるとやっぱり、早いじゃないですか、憶えるのが。ですから、そういう授業をしたいな、とは思っていました。
　だから、訓練校に行くと普段の仕事より疲れますよ(笑)。時には朝から晩まで拍子木叩いていますから、自分の腕がパンパンになります(笑)。

—1日どれくらいやるんですか。
宮村　朝9時から夕方5時までずっとやっています。

—長いですね。
宮村　授業は週3日。パソコン、学科、実技がそれぞれ1日です。実技の講師は4人いますから、基本は月に1回。ただ、それ以外に技能検定の講習会とかがありますから…。年間スケジュールで授業の日が決まりますから、その日は絶対に仕事は入れられません。授業は一人でやりますから、拘束されます。

—助手はいない。
宮村　一人ですね。朝から晩まで。僕のときは“やり仕舞い”となると、延々とやります。出来るまでやる。その日のテーマがハンダでしたら、生徒は初めてですから皆が、ハンダ付けが出来るまでやる。だから1日でも足りないくらいです。

—訓練校の生徒さんのはさみを、全部研ぐことまでしている。
宮村　訓練校では生徒の使う道具は全て揃えてあります。ですから、はさみは前に使った生徒の癖が残っていますから、新入生には同じレベルのものを与えて

あげなきゃいけませんからね。はさみを使ったときに「先生、僕のは切れない」と言われないようにしなければいけません。

—どんな先生ですか。
宮村　そうですねぇ、僕はけっこう昔風の考えの持ち主なので、言うこと聞かないとドツきますからね(笑)。はさみの実習でも「切れ、切れ」ってドンドンやらせます。そうすると途中で数名の生徒たちが手から血を出している。「痛い、痛い」って(笑)。

生徒たちには、訓練校は高校や中学とは違うって言っています。「飯の種やで、ここで真剣にやるかどうかで、君たちの収入が変わる、そういう気持ちでやれ」って。高校は「どうサボってやろうか」でもいいですけれど、ここは「今日、どれだけのことを覚えて帰るか、それで日当変わるよ」…と。

—昨年は、“さんフェア大阪2008”で板金ライブショーをやりました。
宮村　板金屋さんというのは、世間に知られていない職業じゃないですか。だいたい、自動車板金と勘違いされますよね(笑)。「屋根葺いて、雨樋付けて、そんな商売見たことないなぁ」と言われちゃう。ですから、板金屋という仕事を広めたくて、いろんなことやっています。

小学校5年生用の教科書にて紹介

去年は板金のライブショーをやりました。主催者から「お客さんの目の前で、金属の板をパッと変えるようなことをしてくれ」と依頼されましたが、板金屋はマジシャンじゃないので、そんなこと出来ません(笑い)…と言いながらも、鉄板をハサミを使わずに一瞬にして真っ二つにしたり、銅板で帽子を作ったり、金属の色を変えたりとかしました。

—講話にも出かけられていますね。
宮村　中学校の講話は、教育委員会のほうが、ものづくり離れの子供たちに「ものづくりはこんなに面白いんだよ」と言うことを伝えてくれと頼まれたのがきっかけです。高校の先生は実技の本職ではないので、よりレベルの高い授業をする為にその部分を本職お願いします、と言うことですね。ですから場合によっては、訓練校へ生徒さんに来てもらいます。うちの訓練校には、道具がそろっていますからね。

—やることも、さわることもできる。
宮村　そうですね。訓練校は、施工実習もあります。淀川製鋼さんの工場におじゃまして、折板を実際に葺きます。何か作らすというのは、意識が変わります。先生が色々考えてくれるといいんですよね。

軽トラで東京へ

—最近のお仕事の中では、金子國義さんの展覧会の会場意匠などもありますね。
宮村　お話もよくしますが、ご存知なんですか。

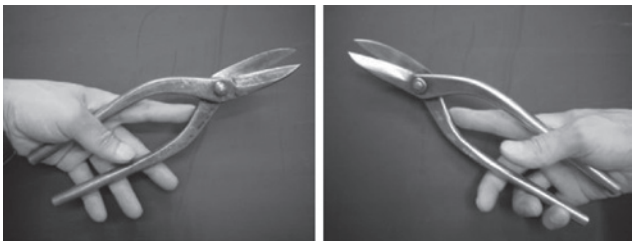
—ご存知じゃありませんが(笑)、学生時代に手に入れた本の装丁が金子さんで、それ以来関心を持っている方です。でも、亡くなられているかと思っていました。
宮村　かなりのご年配ですが、お元気です。こういう方々と仕事をご一緒させていただくと、ファッション

デザイナーとか、普段お会いできない方と知りあえて、ファッションショーのステージの仕事とかいただくこともありますから、ありがたいですね。

—それと、右手が病気になられた。
宮村　右手の親指の骨が人工骨なんです。原因は骨腫瘍、使い減りのようなものです。手術のときは、半年固めたままでした。板金屋ははさみが使えないと、ご飯食べられません。それで、左効きのはさみが使えるように練習しました。今は、左右同時に同じようなものが切れるようになりました。右のほうが切りやすいですが、左でも普通に切れます。ただ、はさみは左右違いますから、道具は全部そろえないといけませんけれど。
　今は右手が使えますから、ＴＶとかで、なんかやってくれと言われたら、パフォーマンスで鉄板を両手で切ってみせるぐらいですか(笑)。

—東京の仕事もけっこう多いようですが、どうしているのですか。
宮村　これで行きます。

—……えっ、軽トラック？。
宮村　こっちの仕事を終えてから夜7時か8時に出発。夜どうし走って、そのまま東京の現場に入ります。みんな大笑いですよ。こんな軽トラックで六本木ウロウロしてたら、「どこの田舎モンが来たんだ」って顔されます(笑)。


左手も右手と同じように

—疲れませんか。
宮村　好きだから、自分で楽しんでいるんでしょうね。

—毎日楽しいですか。
宮村　楽しいですね。朝4時ぐらいになったら、「なんで、太陽早く上がらないんだ」って(笑)。今日はこれをしたいのに…とか思いますね(笑)。外見て「太陽何してるんや、はよ昇ってこい」って(笑)。

—本日はありがとうございました。

◆宮村浩樹氏　略歴
1964年　大阪に生まれる
1983年　大阪府板金高等職業訓練校　卒業
1984年　技能五輪選手選抜全国大会　優勝
1985年　技能五輪世界大会　出場
1989年　全板連・日板協全国技能協議会(現ZIC)優勝　労働大臣賞
1990年　技能グランプリ大阪・優勝
1994年　なにわの名工受賞
2000年　USJハリウッドマジックショー工事
　　大阪府板金高等職業訓練校　講師
2001年　大阪歴史博物館(大正末期～昭和初期)心斎橋・道頓堀復元　参加
　　建築板金・ダクト板金　技能検定委員
2003年　大阪テクノマスター
　　NHK ドラマ「てるてる家族」ドラマセット製作
　　劇団四季 ステージ装飾品製作
2004年　愛知万博　メインステージ装飾工事
2005年　名古屋ハブテック・展示ブース装飾工事
　　国土交通大臣顕彰　建設マスター　受賞
　　内閣総理大臣顕彰　日本ものづくり大賞
　　毎日放送「ちちんぷいぷい」出演
2006年　竜童組・スタジオティンカーベル　看板デザイン製作
　　サイエンスチャンネル「匠の息吹を伝える」出演。
　　神戸コレクション　ステージ意匠担当
2007年　金子國義　画伯　「絵画とシガーの夕べ」会場意匠
2008年　さんフェア大阪2008　板金ライブショー
2009年　第9回「夢づくり工房」匠の技披露
　　09年度小学5年生用　社会科教科書(副読本)掲載
　　朝日放送「Newゆう+」出演

◆資格
1級建築板金技能士　1級ダクト技能士　建築施工管理技士　職業訓練指導員
大阪市立中学校職業講話担当　大阪府立布施工科高校外部講師